



齋藤真一先生

藤原郁夫

「**賢女**」を描く画家として名高い齋藤真一先生が、母校でもある岡山県立天城高等学校の教壇に立ったのは、昭和二十五年（一九五〇）から二十八年（一九五三）にかけての僅か三年間であった。

先生は、東京美術学校（現・東京芸術大学）を卒業後、洋画家を志して東京にいたが、戦後の厳しい経済事情の中で生活に窮し、郷里味野（倉敷市児島味野）に帰郷して、地元の味野中学校や天城高等学校で美術を教えながら作画活動をしていたところのことである。

私が天城高等学校に入学したのは、昭和二十六年（一九五一）であるので、先生が郷里で過ごした最後の二年間を共にすることができたのである。

当時の高等学校カリキュラムでは、美術は自由選択になっていて履修しても、しなくてもよい科目であったが、子供のころから絵を描くのが好きであった私は、美術を選択して齋藤真一先生に学ぶ機会を得たのである。

先生の授業は、風景を写生することが多かった。暑い日も、寒い日も風景画を描いた。

出欠の点呼をした後、大抵の場合「今日は広田山で風景写生、完成したら組、番号、氏名を書いて教卓の上に提出すること。」と指示をしていた。

広田山は、学校の近くにある小さな丘で、頂上からは、遙かに児島湾を望むことができた。足元には、集落や稲田が拡がり、下津井と茶屋町を結ぶ軽鉄の線路があった。

線路の向かいには、赤土の禿山があり、私はこの禿山を好んで描いていたのである。

松林ごしに見る禿山は、セザンヌが描いたセント・ヴィクトワール山に似ていて、当時セザンヌに関心を持っていた私には、絶好のモチーフであったのである。

先生は、かなり広範囲に散らばって写生している生徒一人一人を巡回して指導していたが、それぞれの長所を見付けて誉めることはあっても、欠点を指摘することは絶対に無かった。

この指導方針は、後日、私が美術の教師として、教える立場に立った時、大いに参考になったのである。

校庭から片原の方面へ越える切り通しを描いていた時のことである。私の絵をみた先生は、岸田劉生がこれに似た構図で山道を描いていること、物を厳しく観察し、深く追求する劉生の制作態度を学ぶ必要があることなど熱を帯びた口調で語ったのを思い出すのである。

齋藤真一先生は、当時、緻密な表現技法で静物画を描いていた。現代美術のスーパー・リアリズムを先取りした精密さとリアリティがあった。

古筆笥の木目、取手金具の彫金文様・飴玉の縞文様まで細密に描き表した静物画をみた記憶がある。はっきりしたことは言えないが、私の記憶の中にある絵は、現在・倉敷市立児島図書館にある「追憶」ではないかと思っている。

私は、片原の切り通しを描いて以来、劉生について少し勉強した。劉生のことを知れば知るほど齋藤真一先生の絵の中に劉生を感じるのであった。この時代の先生は、岸田劉生のリアリズムに強く傾倒していたにちがいない。

昭和二十八年（一九五三）天城高等学校を去った齋藤真一先生は、静岡県立伊東高等学校教諭になるのであるが、昭和三十六年（一九六一）青森への旅で、視覚障害のある女芸人「**賢女**」と運命的な出会いをするのである。

昭和四十六年（一九七一）「星になった**賢女**≪みさお賢女の悲しみ≫」が、第十五回安井賞展で佳作賞を受賞し、齋藤真一の名声は我国の洋画界に不動のものになったのである。

山形県天童市に「齋藤真一＝心の美術館」がある。数棟の古い酒倉を改造したものであるが、内装も酒倉の味を生かしていた。

薄暗い酒倉の古びた板壁の上で齋藤真一先生特有の朱赤が輝き、酒の香が残る空気の中に齋藤真一が描いた女たち、「**賢女**」や「**遊女**」の呼吸を感じたのである。

倉敷市立美術館長